

横山ゆずり作 「見えないあしたに向かって」

<前編>

入試教官 (エコー) はい、それではやめてください。鉛筆を置いて。答案用紙を後ろから集めてください。

高橋圭子 (エコー) どうしよう。まだ半分も書けてないよ。こんなんじゃ落ちるに決まってる。待って。待ってよ～！

(モノローグ) ハッ！(目が覚める)…なんだ、夢かあ。イヤな夢見ちゃったなあ。ああ気分悪い。よりによって高嶺高校の入学試験に落ちる夢なんて。(時計を見て) まだ6時じゃない。気分直しにもう一回寝ようっと。あ、ダメダメ、今日から学校へ行く前に1時間勉強することにしたんだっけ。今日は英語の書き換え問題でもやっておこうかな。

ナレーション 高橋圭子は中学3年生。2か月後に迫った高校入試を前に大奮闘。県立の名門、高嶺高校を目指して頑張るのでありますが…。

<タイトル>

男子 よう、おはよう。

圭子 おはよう。

小谷好美 おはよう、圭子。

圭子 あ、好美。おはよう。あ～あ(大きなあくび)

好美 やーだ、何よ圭子、寝ぼけた顔しちゃって。

圭子 だって今朝、6時に起きて勉強しちゃったんだもんねえ。あ、そうだ。好美はさあ、正夢とか信じる？

好美 はあ？ 何、急に？

圭子 わたし今朝、暗～い夢見ちゃったんだよねえ。なんと、高校に落ちる夢。

好美 なっ！ 圭子、そりゃ、かなり暗いねえ。

圭子 でしょ？ でもさあ、朝見る夢は逆夢とか聞いたことあるしさ。それで好美はクリスチャンじゃない？ だから、どうかと思って。

好美 夢は夢だよ。心配することないって。それにあたし、圭子のこと、ちゃーんと「受かりますように」って神様にお祈りしてるから、大丈夫よ！

圭子 ほんと？ サンキュー！ 正月の初もうでに行った時には、絵馬も書いたし、お守りも買ったし、これでキリストさまも加わったら、“鬼に金棒”っていうものよ。やったねー。

好美(モノローグ) ちょっと違うんだけどなあ…。

ナレーション 圭子の親友、小谷好美はクリスチャンでした。5年前に父親を亡くした好美は、早く社会に出て母親を助けようと、商業高校を希望していました。こうしてお互

いに励まし合う2人でした。

好美 あたしね、高校に入ったら簿記の検定取りたいんだ。簿記ができればさあ、就職のとき有利でしょう。

圭子 へえ、簿記かあ。しっかりしてるね、好美は。わたしはねえ、もし高嶺に入れたら…。

(音楽) (ブリッジ。想像)

下級生女子 圭子先輩、おめでとうございます。さすがですね。

男子 高橋、やったな、お前。見直したぞ。

主婦 高橋さんとこの圭子ちゃん、今度高嶺高校に入ったそうよ。大したもんだわねえ！

(音楽) (ブリッジ。想像終わり)

好美 圭子、圭子ったら。どうしたの？ 一人でニヤニヤしちやって。

圭子 え？ ああ、なんでもないのよ。とにかく、お互い、頑張ろう！

ナレーション …とまあ、こんな調子。ところが、そんなある日――。

好美 圭子、あたし、もしかしたら高校行けないかもしれない。

圭子 え？ 好美なら平気だよ。絶対受かるって。

好美 そうじゃなくて、最近お母さんの具合が悪いのよ。お医者さんは、「働きすぎだろう」って。もしこのまま入院なんてことになったら、あたしも働かないとねえ。

圭子 ええ！ ほんとに？

好美 うん。でもね、就職しても、定時制行こうと思うんだ。あたしはさ、圭子みたいに頭よくないけど、英語とかは割と好きだしね。勉強は続けたいんだ。圭子には、高嶺高校という目標があるんだから、あたしの分まで頑張るって。

圭子(モノローグ) “目標は高嶺高校”か…。だけど、もし受かったとして、それからどうなるのかなあ。高校に入ったら、また大学受験のために勉強して、大学入ったら、そのあとは？ いい就職？ それじゃわたし、今何のために勉強してるんだろう？

ナレーション そんな圭子の気持ちにはお構いなしに、慌ただしく時は過ぎてゆき、ついに受験校を決める最後の進路相談の日がやってきました。

担任 ええと、高橋は…と。うん、高橋の第1希望は高嶺高校だったな。

圭子 はい、一応。

担任 “一応”とはなんだ、“一応”とは！ いい加減な気持ちでは高嶺はムリだぞ。いいか高橋、お前の今までの偏差値の平均は65だが、もし高嶺をねらうんなら、最低で68は欲しいところだ。高橋の場合はだな、うーんと、うん、国語と英語は比較的安定しているんだが、数学に少しムラがあるな。よし、あと1か月でこの数学を何とか…。

圭子 (さえぎって)先生、わたしよく分からないんです。

担任 うん？ 分からないんなら、ほら、数学の久保田先生にでもどんどん聞きに行

けよ。

圭子 いえ、数学じゃなくて、あの、自分が何のために高嶺高校を目指しているのか、分からないんです。いい高校に入ったからといって、やりたいことも特になし、ただなんとなく受験するなんて、意味がないんじゃないかって気がしてきたんです。

担任 お前、今の時期になって何を言ってるんだよ！ 目的なんてものはだな、入ってからいくらでも探せるじゃないか。お前はもう一步頑張れば大丈夫なんだぞ。「受験に意味がない」なんてそんな甘ったれたこと言ってるヒマはないんだ！ 同じクラスの小谷好美を見ろ。家の事情で働かなきゃならないんだぞ。お前もう少し真剣になれよ、真剣に。

ナレーション そしてその夜――。

(音楽) (BGM)

圭子(モノローグ) わたしはわたしなりに真剣なのに。先生に分かってもらおうなんて思ってなかったけどさ。でも、何も好美のこと持ち出して言うことないじゃない。ムカつくなあ。

DJ ハーイ、元気でやってる？ 最新ヒットナンバーとオシャベリでお送りするミッドナイトミュージック。今夜もまずおはがきから行ってみましょう。えーと、神奈川の高校1年生、ヒロシくんからです。「この番組を聴いている受験生諸君へ。みんな、高校なんて行ったってしょうがないぞ。」うーん、なんとヒロシ君、初めからカゲキなご意見ですねえ。続けます。「おれは中学の先公にだまされた。『高校くらいは行っというほうがいい』とか、『お前の偏差値ならこの辺だ』とか言われて、適当なところへほうり込まれた。入ってみたら、中学の延長だ。こんなところに来るためにアクセク勉強したのかと思うと、アホ臭くて腹が立つぜ。先公たちは、自分の点数稼ぎたくて、一人でも多く、少しでもいい高校に生徒を送り込もうとするけれど、みんな言いなりになるなよ。自分の人生なんだから、自分の思いどおりにやらなくっちゃ後悔するぜ。」…ということで、神奈川の“高校やめたい少年”ヒロシ君、リクエスト曲は…。

(効果音) (「パチッ」とラジオを切る)

圭子(モノローグ) あー、このまま行ったら、わたしもあの人みたいに後悔するのかもしれない。こんな半端な気持ちで受験しようっていうんだもんね。みんなは平気なのかなあ。好美は？ ううん、好美はちゃんと目的があるんだ。わたしのほうが成績よくて、いつも勉強教えてあげたりしてたけど、ほんとは好美のほうがよっぽどよく考えてるんじゃない。それとも、先生の言うとおりに、今ごろの時期になって、こんなこと考えちゃうわたしがバカなのかなあ。あーもう分かんない！ 頭中こんがらかっちゃって。数学どころじゃないよ。試験まであと1か月もないのに。どうしよう…。

ナレーション そんな圭子の中途半端な気持ちでは、最後の追い込みに身が入るはずもなく、ただ時間ばかりが過ぎてゆくのでした。

(効果音) (教室のガヤ)

好美 圭子。いよいよ来週だね、県立の試験。頑張るのもいいけど、最近ちょっと顔色悪いんじゃない？ 今から体力つけといたほうがいいよ。

圭子 それがさ、わたし…。

好美 何？ 何かあったの？

圭子 うん。わたしさ、高嶺受けるのやめようかと思って。

好美 高嶺を、やめる？ だって圭子、願書もう出してあるんでしょ？

圭子 うん。出したことは出したけど。

好美 なら、どうして？ 今まであんなに頑張ってきたのに。

圭子 うん。確かに頑張ったよ、「高嶺に受かろう」って。でもわたし、考えちゃったんだよね、「そのあとどうなるのかな」って。そしたらわたしの場合、別になんの目的ってもんもないし、そんならアクセク勉強して、いい高校目指すのなんて無駄かなとか思っちゃって。そんなことゴチャゴチャ考えてたら、最後の追い込みどころじゃなくなっちゃったんだ。こんなままで受けても受かりっこないし、そんならいつそ、受けないほうがマシかなとか思ってさ。

好美 どこがよ！ どこが受けないほうがマシなのよ！

圭子 な、何よ。怒ることないじゃん。

好美 あたし、はっきり言っちゃうけどさ、圭子は結局、失敗するのが怖いもんだから、始めから逃げようとしてるんでしょ？

圭子 違うよ。あたしは…。

好美 だれだってさ、高校入ってその先どうなるかなんて分からないんだよ。でも、“きっと何かあるはずだ”と思って、目の前にある受験にぶつかっていくんじゃない。みんな不安なんだよ。勉強だっとうまくいかないときもあるし。怖くて仕方ないんだよ、落ちこちたらと思うと。だけど、乗り越えようとするんじゃない。それなのに圭子は、高嶺にだって頑張れば受かる頭があるのに、ずるいよ、そんなの。落ちたらカッコ悪いから、最初から逃げ出すなんて、圭子らしくないよ。

圭子 そんな…。そんなふうに言うことないじゃない。好美になんかわたしの気持ち分かんないんだ。そうだよ。高校受けなくていい人になんか分かるわけないよ！

好美(モノローグ) 受けなくて、いい人？

圭子 好美…。

(音楽) (葛藤のピアノ音、高まって。)

<後編>

(音楽) (不安感)

ナレーション 受験勉強に行き詰まった圭子は、親友の好美に高嶺高校をあきらめようとしていることを相談しますが、好美の意外なほど厳しい言葉に思わずカッとなり、言ってはならないことを言ってしまったのです。

<タイトル>

圭子 (エコー) 高校受けない人になんか、気持ち分かんないよ！

(モノローグ) 事情で受けられなくなったってこと、知ってたのに。それで一番つらかったのは、好美なんだってこと、分かってたはずなのに。よりによってあんなひどいこと言っちゃうなんて。好美に謝らなくちゃ。…うん、ダメだよ。今更どんなに弁解したって、もうあの言葉は取り消せない。好美は、自分が受けらんなくなっても、わたしを励ましてくれた。「神様にお祈りしてるから」って言ってくれたんだ。それなのにわたしは、好美のこと傷つけて、自分だけ平気な顔して高校行くつもり？ こんなわたしなんか、わたしなんか、“進学する目的”とか、そんな偉そうなこと言う資格、ないよ。

ナレーション そして 1 週間後の、県立高校の入試の日、何とか受験はしたものの、最後の追い込みにも手のつかなかった圭子にとっては、高嶺高校は“夢のまた夢”になってしまいました。

下級生 (エコー) 圭子先輩、おめでとうございます。さすがですね。

主婦 (エコー) 高橋さんとこの圭子ちゃん、今度高嶺高校に入ったんですってよ。大したもんだわねえ。

圭子 やめて！ わたしもうダメ、ダメなのよ！

ナレーション 受験に失敗した惨めさと、親友を傷つけてしまった自己嫌悪とで、半ば自暴自棄になる圭子でした。そんな彼女のもとに、一通の手紙が届いたのは、圭子が学校を休み始めて 2 日ほどたったころでした。

圭子(モノローグ) 手紙？ だれからだろう。差出人が書いてないじゃない。

(効果音) (封を切り、手紙を取り出す)

圭子 (読む)「圭子、どうしてですか？ この間、ヘンな別れ方をしてしまって、ずっと気になっています。」これ、好美じゃない！…やっぱり。「高嶺高校のこと、先生から聞きました。わたしは、圭子に対して(好美の声に)何も言う資格はないかもしれないけれど、でも、これだけは言わせてください。投げやりにならないでほしいんです。やっぱり、高校へは頑張って行ったほうがいいよ。圭子にね、会ってもらいたい人がいるんです。あたしの行ってる教会の人。その人ならきっと圭子の悩みを分かってくれると思います。今度の日曜日、あたしの教会に来ませんか？ 待ってます。好美。」

圭子(モノローグ) 好美。わたしのこと、怒ってないの？ わたし、あんなひどいこと言っちゃった

のに。どうして、どうしてなの？

ナレーション

圭子は、その次の日曜日、好美に誘われるままに、初めて教会に足を運びました。そこに何かを期待する、というよりはむしろ、ワラをもつかむ思いを抱いていた圭子でした。

(音楽)

(賛美歌BGM)

好美

圭子！

圭子

あ、好美！ わたし…、ごめんね。

好美

いいって。気にしない気にしない。それよりさ、ちょっと来て。

圭子

え？ ちょ、ちょっと待ってよ。

好美

田口さん！ この人なんです。前にお話してた…。

田口紀子

あ、えーと、高橋、圭子さん？

圭子

あ、はい。

紀子

初めまして。わたし、田口紀子です。今、青春高2年なんです。いつも好美ちゃんからお話は聞いてたんですよ。今日はいろいろ大変な中、教会に来てくれて本当にうれしいです。

圭子

あの、わたしのこと、知ってるんですか？

好美

うん。いつも祈祷会とかでお祈りしてもらってたんだ。受験のこととかもね。

圭子

わたしの？ わたしのこと、お祈りしてくれてたんですか？

紀子

ええ。好美ちゃんから聞いて。それでね、わたしも、高校進学ではいろいろゴタゴタしたから、なんとなく気持ちが分かるかもしれないな、なんて思ってね。わたし、本当だったら高校3年のはずなんです。みんなより1年遅れちゃったもんで。

圭子

え、あの、落第したんですか？ あ、すみません。

紀子

(笑い)いいのよ。実はね、私立の曙高校に行ってたんだけど、合わなくて、次の年、県立の青春を受け直したの。

圭子

え！ あの名門 曙に？ それがどうしてやめちゃったんですか？ もったいない。

紀子

わたしも初めは、受かって喜んでたんだけどね。結構お嬢さん学校で、聞こえもいいし、大学にもエスカレート式で行けるしね。でもだんだん、こうなんか違うな、って思っちゃったの。みんなやたらプライドが高くて、みえっぱりって言うか。そのくせね、例えばトイレの使い方なんかひどいのよね。もうがっかり。幻滅しちゃってね。それで、教会でもみんなに祈ってもらってたの。

圭子

そういうことなんかも、お祈りしちゃうわけですか。

好美

そうよ。ね、田口さん。

紀子

うん。それでね、いよいよ悩んで、“学校変わろうか。それとも、このまま我慢しちゃおうか”なんて考えていた時に、聖書読んでパッと目に入った言葉があ



ったの。それはね、えっと(聖書をめくる)旧約聖書のエレミヤ書ってところなんだけどね。ちょっと読んでみるね。「わたしは、あなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。それは、災いではなくて平安を与える計画であり、あなたがたに、将来と希望を与えるためのものだ。」というのね。“これは、神様からわたしへの約束だ”、って思って、それから自分の将来をもっと明るい目で、希望を持って見られるようになったのよね。

好美 あたしが目指してた高校に行けなくなったでしょ。その時はさ、倒れたお母さんを恨んだりもしたんだよね。

圭子 好美、そんなことわたしには言わなかったから、“スゴい。強いな”って思ったんだ。

好美 ううん、強くなんかないよ。でもね、あたし、自分が思ってた進路がダメになって、やっぱりスゴいつらかったけど、そのことがあったから、前よりも神様のこと、分かるようになったと思うんだ。だから圭子にもさ、今はつらいかもしれないけど、今、神様のこと知ってほしいな、と思ったんだ。神様が、あたしたち一人一人に、すばらしい将来の計画を持っていてくださるってことを。

圭子 それは、好美たちクリスチャンの人たちには、神様はそうしてくださるかもしれないけど、わたしはクリスチャンじゃないから…。

紀子 圭子さんは、今日初めて神様のことを聞いたかもしれないけど、神様のほうではね、もうそれこそずっと前から、圭子さんのことをご存じなのよ。

圭子 神様か…。

紀子 だからね、悲観しないで。もっと期待してみて。これからの人生のほうが長いんだから。あしたどうなるかってことは今は分からないけど、逆に言えば、それは楽しみなことじゃない。

(音楽) (BGM賛美歌)

圭子(モノローグ) あしたは見えないけど、でも、もしわたしにも神様の計画があるなら、わたしでも、こんなわたしでも、好美や田口さんみたいに、希望を持って進むことができるんだ…。

ナレーション その後、圭子は先生の勧めで青春高校の2次募集を受け、合格しました。自分では予想もしなかった新しい道に一步踏み出す圭子でしたが、その心には、不思議と焦りはなく、むしろ、なんとも言いようのない安ど感に包まれたのでした。そしてその訳は、もしかしたら教会で好美たちから聞いた聖書の言葉にあるのかもしれない、と思い始めていたのでした——。

(音楽) (賛美歌、静かに高まって。)

<完>